シリーズ
学校・園では今
18

誠之小学校の取り組み
～６枚の油絵の向こうに～

誠之小学校の玄関には、「遠く離れた故郷の三重を思う釣り人」が描かれた油絵など６枚の絵が飾られています。これらはハンセン病回復者の故・加川一郎さん(通称名)が生前に「生きた証に」と描いたもので、誠之小学校に寄贈されました。この絵が学校に寄贈されたことをきっかけに、毎年６年生がハンセン病問題について人権学習を進めています。今回の「シリーズ学校・園では今」では誠之小学校の取り組みについて紹介します。

加川一郎さんの油絵が故郷に帰るまで

加川さんは旧一志郡で教師として働いていましたが、ハンセン病を発症し昭和25年に岡山県瀬戸内市にある国立療養所長島愛生園に隔離されました。園内でも小学校の教師として、親から隔離された子どもたちを励まし続けていたそうです。

加川さんが亡くなった後、作品は、同園で知り合った同じ三重県出身の川北さん夫妻に託されます。二人が「加川さんが好きだった子どもたちの声が聞こえる場所に返したい」と、「ハンセン病問題を共に考える会・みえ」共同代表の岩脇宏二さんとハンセン病問題に取り組んでいる草分京子さんに相談し、誠之小学校に寄贈することになり、加川さんの絵は故郷に帰ることができたのです。

加川さん・川北さんが伝えたかったこと

昨年10月３日に行われた授業では、草分京子さんと誠之小学校元校長の馬場明生さんから、寄贈の経緯とともに「加川さん・川北さんが伝えたかったこと」というテーマで学習が進められました。授業の中で、草分さんからハンセン病に関する知識や歴史、その中で偏見や差別があったことが紹介されました。川北さんは小学校５年生の頃から約70年間も愛生園での暮らしを続け、親の葬儀にも立ち会えず、家族も離散しました。それでも、故郷や家族に対する思いを抱き続けてきたこと、また、加川さんが絵に込めた故郷への思いについて話されました。そして、馬場さんからは、「皆さんは差別や偏見がある社会としたいのか、それとも人と人が手をつなぎ、温かい社会をつくっていくのか、あなたたちは、どちらの立場に立って、どちらの生き方をしたいですか」という問い掛けがありました。

授業を終えて

授業後、子どもたちから「これからあの絵をもう一度違う見方で見たい」「一人一人が思い込みで発言するのではなく、自分で確かめることが差別を無くすことにつながると思う」といった感想が出されました。

担任の先生は「きっかけとなったこれらの絵が、この学校にあってもなくても、この問題について学習する意義を感じています。子どもたちは、この学習を通して感じた差別や偏見に対する不合理を自分たちの身近な生活の問題と重ねて考えてきました。その中で自分たちが差別をなくしていく一員として行動したい、ハンセン病の問題も、解決していくために、自分たちのできることを考えている姿がありました」と話します。

社会・家族・故郷と隔離され、「生きた証」を残そうとした加川さんの生き様を学んでいる子どもたち。私たちも事実を正しく知り、その中で生きてきた人の思いや願いに学び、全ての人が安心して生活できる社会をつくるために大切にしたいことは何かを考え、行動していきませんか。